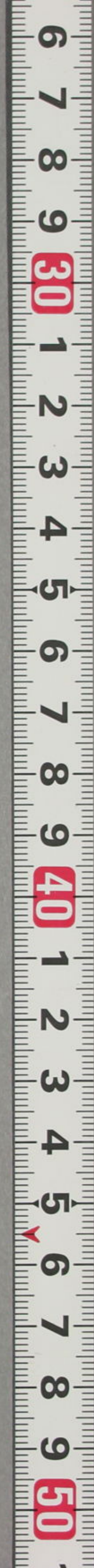




武藏河本及卷三

~ 13
3582
3



門 13
號 3582
卷 3



武藏鎧卷之三

嫖妓并節操

を生まと慎むと有るが如く此三より緒の綱
士も亦うらぶ妻木が色香小逢て銀四郎が妬心を引出名言
我矢ひ又我討て家禄をさへ召放されたる色香の翼を抜
まはしの脚を断る思ふが如く速銀四郎が所在を尋宝
と奪返し又の仇を復さんと志を厲し渠が実又河邑に兵

早稲田大学図書館
昭和 35. 2. 2
蔵書

清が舎藏るゆやと切通一の河邑が家の近隣へいり探まき
 小庄兵清の銀四郎が連座ふか人妻と怖と妻子と引はれ
 逐電せと告る者あり是よりて宗三郎又思慮と廻し大
 野のつまき妻木ふ心とけ度々大磯へ通し由の妻木ふ心
 さを銀四郎が身と倚る方とある妻もあつんと母が旅宿小待
 せ其身一人夜潜小大磯の花扇屋へ到り妻木と招かれだ
 妻木は待たれと折られむ大お悦び座敷へ出る宗三郎と
 妻木が来りてとんと花車と退りしめ声をひそめて曰我今

宵来つる八條小密々同くえ妻あれむ此席中て八人の漏史妻
 もあつ人閑なる所へ伴ひてよとのふとさうを此方とく小座敷
 へ誘ひ往り何妻あつ侍るやと宗三郎洞然とく流
 一今月廿五日の夜我父ハ如此々の妻あつ銀四郎が毒牛小討
 事このへりとして其五千と結ぶと你の渠奴が立寄る方とま
 むやと向妻木ハ宗三郎が物語成て一度ハ驚れ一度ハ恥
 声残吞ては入るがよとく小泪をおさくは凶妻の有とも
 て冬く来りてぬがる残恨こころ思ふさよささる柄借も

扱ふまゝめ、今宵見へ初より御顔色のあはれにも理なき
 くこそ又も洞小沈みこれぞ堀も恥歎小れなるが今ふ如何おけ
 ても其甲斐あり洞小をめてまぐりおなるな死変あふとく
 守りてよとのおど妻木洞小を白彼人吾儕小枕の仇をさせんと
 度々通へども一度も心小従ひまぐりぬを何國小知己の有るも知
 らざるをよよく思めぐらせむ彼人御身と吾儕が二世と契ひ
 妬み其茶釜とやんを盗み御身を罪小陥んとまらう小ハ
 あらざる外小遺恨をさしませむ妻の侍るやと問小より宗

三郎も初て心付実も大野が欲心ありの茶釜と盗むに
 緇なり原より我又小遺恨を合なれ妻もあはれははれ
 推量のぞく我渠が為小誘ふと初て此樓へ入り酒奥小集
 して你と合表成ともおせ時銀四郎我もあはれと先へ
 其後ハ我が郎もあはれと此廓へ入り毎小誘へども左右小妻
 よせ日意せざるが以て推量むくりとあの色情と遺恨小
 せしめ我小名器を失せ自滅させんと謀りを我又小見死
 られ又を針て退りあはれ噫心穢れ奸賊とめと拳と握り



牙と嗔怒の洞小袖成ひはしれは妻木もさくさくし瘡を穿く
 ろくろ御身おくる禍をうけ進め世ハ皆吾儕が科なりさそ又
 君の九泉あり吾儕と恨めしめ先其敵より此身と刺殺
 して又君の憤を暗しゆとひは又も泣入れを宗三郎是
 次慰め是れ科なりを我身より凶錯刃浪々せし我
 罪あり唯遺恨ある大野匹夫なり一念凝と死ハ凶敵も
 箭の旨例あり誓て渠奴が所在を捜し本意を達せど
 止むれぬさむれ勝負を時の運ふれを討も討も討も

定むらうのてへ父母小願出し夫婦おある人し契約せし
 も今ハ甲斐なり空ぶのめなりれ你今より我妻を思ハ
 断らるる人ふもさくさく身の脩をさくさくしお妻
 木ハ歩も果むとよくと後足ハ情なり妻とのささふる早
 死勤をさすれども一旦御身と二世の契成るは上ハ再び
 他人小身をまうはなれ心とをさくさくとあられ心の俣あり
 御身とひくく敵の行方と尋まはしれどいまさ年の内
 かりを叶はむとよきさむを女身われを足年よと

とちりのやせおし世ふあぐく憂耻死ん人死
 と操我全し九泉小在と冒君小此身の罪と謝す
 んと堀が指添ふき残るる我宗三郎早く抑へ是ハ物小
 狂へるう今你刃小伏く死せむ其咎め我身小うと忽心ち
 復仇の望を失たし先手放あて我言とせよ死と以
 て操を破るとおの心たるを我又其志を破らんや此上を
 運成天小まうせ敵我尋の室を奪返し家再奥乃本
 意成達せむ你を迎へ妻とせしと又討おひくと安ん

それ迄の縁とあはるもの人理を盡しと練くが妻木傳く
 承引く。然のま人を死成とまり也。但し御身敵と母の
 小母君を伴ひのひてと万善心小まをゆ。御身の母公と吾
 倚の姑君わり敵と討く帰めと追吾倚母君を預まいつても
 して貢進せし。御身ハ人心の依小敵と尋のふとり小と宗三
 郎大小感し如是なれを我又何を憂なれ。され費お死
 嫖妓の身小母成預て。你を煩きとも木意おとると人を
 妻木推返し否其更ハ心おけのひと姑君一人を貢人小何辨

の妻侍るが死しぬれば妻の氣を屈し玉を先酒を飲め心
 成強かりぬとて花車小傘とて酒者ととりてせ堀小勧め其
 身ものぞ借曰々々の吾倚明只姑君を預る宿を頼置をく
 し。妻調ひかむ書信して去るを進せし間文小紀せし方母御
 を伴ひ来りしと約し猶行末の妻まで契約しつ。夜々更
 ゆれを宗三郎八別と告ぐ旅宿へ入る。母真弓も妻木がひ
 ねむむねを語りぬ。真弓も妻木が貞節を感し。母子ともに
 其夜ハをこし羽立日妻木が音信を待居る。其日の夕々ふ

妻木が去る世の書信ききりぬ。大悦び母を伴ひてその
 さづの家へ到る。妻木は先へいり待りて有る。宗三郎
 悦び母を頼り其身の復仇の出立をたかひたる。

高容乃嗜慾

却説大野銀四郎の茶入を奪取師より宗右衛門を切害
 して國を去退るが多賀家より厳しく其踪跡を捜し
 ぬらむるふより。昼夜安んず心なく。昼ハ茂林竹藪をふふ
 伏隠夜ハ徑用道を歩む。衛都近死大津の街にたれ哉



五更の月影を
あやかし
おぼろけ
の光
を
み
て
は
い
か
ん
な
ら
し
い



五更の月影を
あやかし
おぼろけ
の光
を
み
て
は
い
か
ん
な
ら
し
い

五更の月影を
あやかし
おぼろけ
の光
を
み
て
は
い
か
ん
な
ら
し
い

古道具屋の店六十六部乃笈天蓋なるもの有と云々是
 我身の隠竹立あり究竟なりと其家へ立入俄に浪々して難
 法なるより成り帯とる大小刀を賣笈天蓋を買とる是
 より六十六部の躰とかり京の町へ入り門々ふとるの肉乃
 茶錢を乞とるが烏丸通下立賣切茶茶店商人店有
 くれむ此家少て勝用乃茶入を賣金成得んものと竹及門
 切ふおら立入り主翁み對ひ小子八肥前長崎の者あてい
 親なる者華人より交易せ茶茶あり我ハ茶道を學ひ

又より讓請れども其名さへあふとされども親の記
 念われ今薄命して回國の修行者とわれども身と離
 すと持とる頃日患病ふと各茶館の科不盡血縁は日
 寶ハ身のさし合と申親の遺物ながら賣拂とるわれ
 人間一入救とおひ買とりてせむらとやと織とるわれハ
 主翁の証とあり其ま氣の毒なる妻也尤往來人あり
 物我買取ハ上の法度われも難法とわれ品ふより買
 取らん先其言とんふと銀四郎笈の内より茶茶

を取出さしと志するが又肚の内小おらう此茶器元東山殿の
 所藏して囊ハ蜀江の錦箱書付ハ堀越殿の政知と勝因の二
 字と自ら書付めむ此後又とるなむむ万一見知られて身上
 の大妻小及人も量がじ只茶器をうると賣こそよめれと奸智
 成回一管と袋ハ笈の内小隠し置茶器をう成古死ふさ
 巾包て入せり此玉羽ハ道具屋と市とて頗る目利者ふ
 里々ハ茶入を熟うておらう此茶器の土味茶は模様必
 と唐物なるじ華人より得たりとりも宜かり且彼茶事と

ありとて價の貴賤をも考へは小金多く買取大利を得ん
 めとて銀四郎小對ひ此器良とりとも少一大型とて當時の
 流行小向は銀とも難流とあれ山金五兩小買取なりと云
 銀四郎欄もて又の終結ハ千金めも猶賣なうと云
 との成今猶數十金買上りとりともと市頭と振石も自ら
 所持の器皆其ごとく貴くおら物く五兩の上ハ一錢も買上
 げしとてさしゆとて賣人の足元を足く見付まは是高人の
 常おらじ銀四郎ハ捨賣おりとも百金得たりとおらハ乃外縁

五金小賣金を如何とせしむるも此品を所持する時ハ夜も安く
ハ寝かじしつゝ禍の本なる苦くしや賤くとも賣渡し五金
あて得るや不如と遂に五兩小賣拂ひ金結取て足早小
そま去るる市ハ希有の名品を總の價めて買取怡ぶと
限なく莫大の利を得んものと古也鳴して居る処小道具
仲間の支使入まりのふと市殿安し人鎌倉殿随従乃大名
支賀殿の重宝勝用の茶入を盗去り賊ありや其品を賣
小来る者あつむ捕置て辨人せむ莫大の褒美と賜らん

となりや又私小買取者ハ本人とい罪はばと觸たり宝
印姓名前の下に押しと云つ三通の書物とさし出ると市ハ
何心なく是をさしふ一通ハ茶入の形土茶の色囊管の銘
まで微細小紀一通ハ銀四郎が配符也。先の六部ハ人相とす
ぞも違ふと。然も我買取茶品書付の形寸法とひりくと
符合しるふと心中大に駭死借ハ只今来也六部ハ茶入の蓋
賊とて善正しく勝岡の茶入の蓋は如何と惘果たる
がさあぬ体あつ觸書小承知判押て支使をさしめると

市や川へ溜息つ死件いづれかの益我取出して見るふいふ觸書と
符合ふあひしぬい太後悔たごうご我過われあまてよめれ品を買かりし已い禍わざを
招よきたるもも管囊えんふりぬむままるまの僥倖えんけいなりまる
ぬ人小賣うりくも本金もとのかねなりも取とるものと思おもひ妻女子つまこあもまる
世と徳とく一置おきるぬる南都なんと乃任なる人半井はんせいト仙せんとと富ふ
豪ごうの醫師いしありぬ近ちか頃ころより茶事ちあとと学まび良器りやうきあるとた
ハ高金たかきんと厭いとをを買かりる事度ことど々々なり元来もとより道具屋どうぐやと市
が得意とくいある。折せ節せつ茶事ちあの用具ようぐを注文ちうもんとと書状しよじょうと市

が方かたへ至来しき一いつふふより是これ究竟くわいけいの事ことなりぬ彼半井かはんせいを古ふるた
茶人ちやにんあもあるぬれぬも勝因かついんの茶入ちやにを志しはままト仙せん件けんの益えき
を賣人うりあのとく注文ちうもんの品しんを取とりて彼茶入かちやにをも相あ應おうの旨しみ
小入こいりり携たへる茶良ちやら下した半井はんせいが絆はへ到いたるぬト仙せんととそ
とて茶室ちやしんへむむは注文ちうもんの品しんと請うける薄茶うすちやと点ちりてなり
少時せうじ茶結ちやむすふ及およびる多おほく市いちト仙せん對たいひ頃ころ日西にせ國くに迎むかへる珍めづ
し茶器ちやぎと買かりて件けんの益えきと取とりて仙せん是これと
多買家たがいけの重宝ちゆうぼうとと愛あいもも志しると天晴あはれ希代きだい乃名物なぶつなりぬ

買ま欲丸心類小生一其價を問ふと子市早く其急中を
 察し是茶苦ハ恐く日本無類の苦ふくう囊とりけさう
 難かり君此品亦相應の華物の囊くまわふ四五百金の價を
 有る街も裸なれむ七十金と賜ふ御手ふ入りとのりもト
 仙やまそふ余り小貴し五十金めて需あんとり子市猶まがく
 價の押引くたるが遂ふ五十金小賣渡し金と結取て心中潜小
 怡ハ別を告く京師(むら)りたる

復仇むさゝ鑑巻三終

六号ノ五